

日本地衣学会

No.58

ニュースレター

Newsletter from the Japanese Society for Lichenology

目次	会員通信	203
	第17回青空地衣教室回想／滝沢寿一	203
	古タイヤにウメノキゴケ／川名 興	205
	橋桁を飾る地衣類／原田 浩	206

会員通信 From Members

第17回青空地衣教室回想

にいがた地衣人類新参者 滝沢寿一

1. 二度目の正直

2005年9月4日(日)新潟県湯沢町山鳥原公園内(緯度 36° 49' 経度 138° 46' 標高概ね 900m)で第17回青空地衣教室が開催された。

ここは雪国新潟県と関東を結ぶ幹線ルート三国峠へ向かう国道17号線沿いにあり、車の便はよく地衣類観察地として良好な場所である。ようやく実現したこの教室は、昨年にも計画されたがあの激甚災害の新潟県中越地震(平成16年10月23日)発生直後で中止されていた。今回もこの周辺地域では、お盆後の豪雨による土砂崩壊の発生で道路や農地の被害があった他直前まで様々な出来事が重なり、何かしら一抹の不安が続く日々であった。

しかし当日は19人が参加した。嬉しいことに地元で開催される初めての観察会で初参加者が4人もいたことである。そしてなんとか強い雨にならないうちに終ることができた。

帰宅すると、「・・・直前までいろいろ起きて、終わるまで本当にヒヤヒヤでした。ようやく実現しました

ね」のメールが届き、私からも「・・・いや～ほんと、やっとなという感じです。よかったです。また地元にも仲間が増えそうでこれからは楽しみです。」で結ぶ返信であった。

2. 山鳥原公園

国道沿いの千m級の豪雪地の山間いであり、平標山及び苗場山(赤湯コース)への登山口である。

観察は最初、初心者向きに地衣類についての簡単な説明から始まった。暫くすると参加者が次々とループ越しに木々と頬擦りを始めた(図1)。そのうちに地べたの石面や、土斜面にも頬擦りをする。この仲間では当たり前に見慣れた光景である。しかし他者から見るとなんと風変わりに見えることやら、怪訝にも思うだろう。

直径50~60cmほどの巨木に絡むツタウルシを避けながら講師は幹を手差し(図2)、「カラクサゴケ」、「ゲジゲジゴケ」・・・と留まることなく次々と出てくる。初参加者はループ下の初めて見る美に驚嘆している間もない。ここだけで幾十種も観察できた。どれも冷



図 1. ブナの幹に頬擦りする著者。じつは地衣類観察中。幹の左側にはツタウルシが見える。7月3日の下見の際に安斉唯夫氏撮影。

温帯あるいは亜高山帯に見られる仲間であるが決してこの地に特有のものではないようだ。と言うより新潟県内、いや北陸地域一帯の地衣については誰も調査研究していないという。だからどんな種がどのように生育分布しているのか希少種の存在も全く分からないのである。

確かに今回のために用意された参加者用リーフレット中にも新潟県産リストは 86 種でこの周辺地名からはミヤマハナゴケ (*Cladonia pseudoevansii*)、ウスバカブトゴケ (*Lobaria linata*) 等 14 種しか記載されていない。だから希少な地衣類があるのかどうか不明な



図 3. 山鳥原公園で見つけたカラタチゴケ。7月3日の下見の際に安斉唯夫氏撮影。



図 2. 地衣類を手差しし解説する講師と聞き入る受講者。

のだろう。このような話を耳にして、この先の観察が楽しみになって生き立てられるのは私だけだろうか。

3. 三俣集落の伊米神社境内

山鳥原高原から下ること約 10km、車を走らせ三俣集落に着く。ここは三国旧街道が集落内を貫き参勤交代の本陣跡もある。また苗場山と関係深い伊米神社があり登山口の集落でもある。境内には小さいが清冽な流れがあり川底には「バイカモ」「イワナ」も生息している。何となく湿っぽい環境である。そのせいか神社の床下に蘚苔類の「ヒカリゴケ」が見られるのである。この地域に見られるヒカリゴケは私がホームグラウンドとしている苗場山頂への主な登山道コースで、5箇所確認している。いずれも 2000m 近い標高であるのに、ここは 600m 程で民家が近くにある。それも床下一面に広がっている。珍しいというか、驚きである。最近になって金網が張られた。心無い人から避ける為だろうが網目が小さ過ぎるのではと案じられる。ヒカリゴケは原糸体の細胞が凸状でレンズの原理で弱い太陽光を集め 100 ルックス程度の環境で生育しているといわれているが、今後もこのような微妙な生育環境が未来永劫保全されていて欲しいものである。地衣類もコアカミゴケ、ジョウゴゴケ、ハナゴケ属の仲間、碑石にはアオキノリ属の仲間等が多く観察された。これらもこの境内で永劫に生育しているだろうか。

4. 地衣類の不思議と魅力

自分のなかに、いつ頃からなのか覚えてはいないが、ず〜っと今まで素朴な疑問を持ち続けていることがある。それは「生きていて何だろう、生きていてどういうことなんだろう、どういう現象なんだろう」である。

地衣は共生体、我々も細胞内共生の細胞で組み立てられた組織で形づくられている。地衣体とどこが違うのだろうか？

可憐な花を魅せてくれる高山植物などと違って、地衣類たちは葉も無い根も無い、基物を選ばず、春夏秋冬あまり姿を変えない。積雪の中に埋もれているときはどうなっているのか、極寒や猛暑ではどんな状態なのか、地

衣類が死ぬ（枯れる）とはどういうことなのか。私には分からない不思議が地衣類の魅力になっている。

5. 今後の取り組み

今回の観察会でとにかく嬉しい成果は、この地元に地衣人類の新しい仲間が増えたことだろう。素人であっても一人でも増えることは今後の進展を期待できる。初参加者からは、「大変、面白かった」「益々興味が増した」「本だけではダメだ、現地で・・・」その後の声である。仲間の胸が熱いうちに研修会や次回の観察会が開催されることを期待したい。

古タイヤにウメノキゴケ

千葉県勝浦市鵜原字勝場にある鵜原館の駐車場の車止め用の古タイヤにウメノキゴケが着生しているのを2005年10月3日に観察した（図1）。このタイヤは勝場漁港に面した東向きである。

なお、古タイヤに生える地衣類については、既に本誌43号において、神奈川県丹沢からヤマトキゴケが報告されている。

（川名 興：富津市青木）



図1. ウメノキゴケが生えた古タイヤ。千葉県勝浦市鵜原にて。

橋桁を飾る地衣類

房総半島（千葉県）中部から南部に出かけると、思いがけない場所で地衣類を見つけることがある。例えばガードレール。富山町周辺で多量に地衣類が生えていることは既に本誌 43 号で紹介したところだ。また本号には、古タイヤにウメノキゴケがついていた写真が紹介されている。さて本稿では、橋桁。今年 10 月 11 日に、市原市南部の大福山に写真撮影で出かける機会があった。このとき撮影した写真が図 2 である。

その橋は高欄（落下防止の柵）の外側に太い鋼鉄製の枠がある。トラスというらしいが、赤ペンキで塗られており、これに多量につく葉状地衣とのコントラストが鮮やかだった。橋には「昭和 46 年 9 月竣工」（1971

年）とあるが、少なくとも 15 年ほど前からはペンキは塗り換えられていないように思う。生育する種類は、ウメノキゴケをはじめ、マツゲゴケ、ナミガタウメノキゴケ、トゲウメノキゴケなどで、この地域の地衣類相をよく反映しているように思われた。

この橋は小湊鉄道の上総大久保駅から大福山・梅ヶ瀬溪谷へのハイキングコースの入り口付近にある。これから 11 月中旬から 12 月上旬にかけての紅葉のシーズンの休日には、多くのハイカーが通るが……、さてこの地衣類に気づくか否か。

（原田 浩：千葉県立中央博物館）



図 2. 橋げたの赤いペンキが白っぽい地衣類で覆われていた。小湊鉄道養老溪谷駅（千葉県市原市）から大福山に向かう途上の「ほうえいはし」。

●複製される方へ

本誌に掲載された著作物を複製したい方は、許諾を受けてください。詳細は本誌42号148ページに。

●Notice about photocopying

In order to photocopy any work from this publication, you or your organization must obtain permission. For details, see No. 42, p. 148 of this publication.

日本地衣学会ニュースレター 58号

発行日：2005年 10月 31日

編集：原田浩・岡本達哉・木下靖浩・棚橋孝雄
発行者・発行所：日本地衣学会

〒010-0195 秋田市下新城中野

秋田県立大学生物資源科学部生物生産科学科内